

福岡城  
赤坂門跡

—福岡城跡第26次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第463集



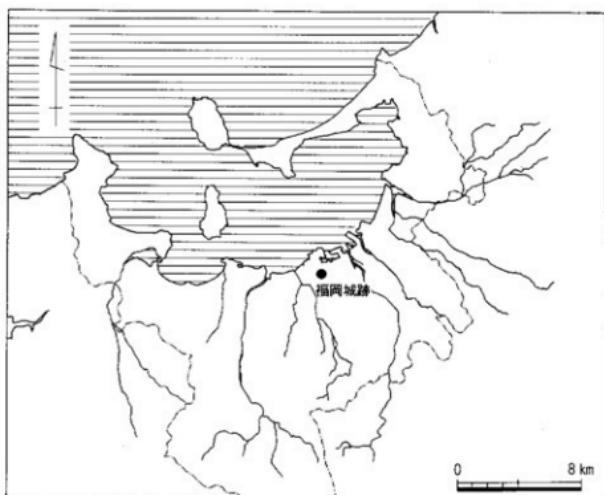
1996

福岡市教育委員会

福 岡 城  
あか さか もん  
**赤 坂 門 跡**

—福岡城跡第26次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第463集



遺跡略号 FUE26  
遺跡調査番号 9416

1996

福岡市教育委員会

## 序

福岡市は古くより大陸との交流の場としての役割を果たし、大陸よりもたらされた豊かな文化財が眠る街として知られています。中でも「福岡」の地名の由来でもある福岡城跡は、昭和32年の史跡指定後、環境整備が進み、現在では市街地中心部に数少ない、縁に親しむことのできる場として市民の活用を受けております。

福岡市教育委員会では福岡城を含めた市内の遺跡を保護するとともに、開発によって破壊される場合には事前に発掘調査を行い、記録の保存に努めています。本書は変電所建設とともに実施した福岡城赤坂門跡の調査成果について報告するものです。調査により、赤坂門の石垣が江戸時代の姿を留めたままで発見されましたが、九州電力株式会社の甚大なるご協力により、幸いにして石垣を地下に埋め戻して保存することができました。

調査に際し、快くご理解とご協力を頂いた九州電力株式会社福岡支店をはじめ、地元の方々や調査に関係された皆様に対し、深く感謝を申し上げるとともに、この報告書が市民に幅広く活用され、文化財保護のご理解を深める一助となることを願います。

平成8年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 尾花剛

## 例　　言

- 本書は平成6年5月23日から7月22日にかけて福岡市教育委員会が行った、中央区赤坂1丁目102-2所在の福岡城赤坂門跡発掘調査の報告書である。
- 福岡城に関する調査としては第26次調査となる。
- 発掘調査は、九州電力株式会社が計画した変電所新設にともなう事前調査として実施した。
- 調査で検出した石垣遺構は、変電所の設計変更により現地に埋め戻され、地下に保存されている。
- 本書に使用した図の作製は、遺構を吉武学(福岡市教育委員会)、正林真由美が、遺物を吉武が行った。
- 本書に使用した図の製図は吉武、田中克子、西村晴香が行った。
- 本書に使用した写真の撮影は吉武が行った。
- 本書に使用した方位は全て磁北である。
- 本書の執筆・編集は吉武が行った。
- 本報告書に関する記録と遺物類は、整理後、福岡市埋蔵文化財センターに収藏し、ここで管理する。

遺跡調査番号	9416	遺跡略号	FUE26
調査地地籍	中央区赤坂1丁目102-2	分布地図番号	
開発面積	1,383.3m <sup>2</sup>	調査対象面積	430m <sup>2</sup>
調査期間	1994年(平成6年)5月23日～7月22日		255m <sup>2</sup>

## 本文目次

I.はじめに	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査の組織	1
3. 調査の経過と保存処置	2
II. 遺跡の位置と環境	2
III. 調査の記録	5
1. 調査の概要	5
2. 遺構	6
(1) 石垣と堀	8
(2) その他の遺構	11
3. 遺物	11
IV. おわりに	23

## 挿図目次

Fig. 1 福岡城跡位置図 (1/25,000)	3
Fig. 2 調査地点位置図 (1/2,000)	4
Fig. 3 調査区位置図 (1/500)	4
Fig. 4 平面実測図 (1/100)	6
Fig. 5 内堀側面実測図 (1/100)	7
Fig. 6 中堀側面実測図 (1/100)	7
Fig. 7 便壇実測図 (1/30)	10
Fig. 8 出土遺物実測図・I (1/4)	12
Fig. 9 出土遺物実測図・II (1/4)	13
Fig. 10 出土遺物実測図・III (1/4)	14
Fig. 11 出土遺物実測図・IV (1/4)	15
Fig. 12 出土遺物実測図・V (1/4)	16
Fig. 13 出土遺物実測図・VI (1/3, 1/4)	17

## 図版目次

- PL. 1 調査区全景（南西から）
- PL. 2 内堀石垣側面（西から）
- PL. 3 中堀石垣側面（南から）
- PL. 4 内堀基底の杭列（南から）
- PL. 5 石垣上面の状況（南東から）
- PL. 6 石垣上面北端の石棄て穴（東から）
- PL. 7 石垣上面南西隅の石棄て穴（東から）
- PL. 8 中堀石垣の刻印（南から）
- PL. 9 中堀石垣のクサビ痕（南から）
- PL.10 内堀石垣のクサビ痕（西から）
- PL.11 内堀石垣のクサビ痕（西から）
- PL.12 石垣上面の状況（南から）
- PL.13 石垣上面の便壺（北から）
- PL.14 石垣上面の便壺（東から）
- PL.15 出土遺物・I
- PL.16 出土遺物・II
- PL.17 出土遺物・III
- PL.18 出土遺物・IV
- PL.19 福岡市南区向野地録神社絵馬
- PL.20 同上拡大

# I. はじめに

## 1. 調査に至る経過

福岡城の東側、福岡市中央区赤坂1丁目16-18において、九州電力株式会社により変電所新設の計画が持ち上がり、平成5年7月26日に福岡市教育委員会埋蔵文化財課に遺跡の有無についての事前審査願が提出された。申請地は福岡市文化財分布地図上では福岡城の堀の中に全て含まれており、石垣等の存在は予想されなかったが、埋蔵文化財課では平成5年8月31日に確認のための試掘調査を実施することとした。試掘トレーニングは、福岡城内堀の外壁に最も近い申請地の北東隅に南北に設け、重機により掘削を行った。その結果、地表下約60cmで石垣の上面を検出した。石垣は申請地の北端から南へ14m伸び、ここで東に折れていた。また、石垣南側の堀の部分を約3m掘り下げたが、堀の基底面には及ばず、石垣は3m以上の高さが残っているものと想定された。埋蔵文化財課では遺跡の保存を考慮し、設計変更を含めて協議を重ねたが、建物の構造上、地下の遺構への影響は避け難いとの回答を得、発掘調査により記録保存を図ることとなった。

発掘調査は福岡市教育委員会埋蔵文化財課が受託調査として実施することとし、調査範囲は石垣が検出された申請地の北東隅の部分に限定した。調査に先立って、九州電力株式会社と福岡市長との間に委託契約書を締結し、平成6年5月23日から7月22日まで発掘調査を行った。また、同契約書に基づき、平成7年度に整理報告書作製を行った。

## 2. 調査の組織

調査は以下の組織で行った。調査にあたり、九州電力株式会社には調査費用をはじめとして、条件整備等で多大なるご協力を頂いた。また、調査中は周辺の住民の皆様にご理解、ご協力を頂き、調査を円滑に進めることができた。ここに記して感謝を申し上げたい。

調査委託	九州電力株式会社
調査主体	福岡市教育委員会 教育長 尾花 剛
調査総括	埋蔵文化財課長 折尾 學（前）、荒巻輝勝（現） 埋蔵文化財第2係長 山崎純男（前）、山口譲治（現）
調査庶務	埋蔵文化財第1係 吉田麻山美（前）、西田紗香（現）
調査担当	埋蔵文化財第2係 山口譲治、菅波正人（試掘担当） 埋蔵文化財第2係 古武 学（調査担当）
調査作業	青柳武、秋山豊、荒木宏隆、石屋四一、金沢春雄、金子國雄、熊本義徳、渋谷博之、 二宮白人、萩尾行雄、藤田圭三、松原高博、森垣隆視、森本勇夫、米倉國弘、金子澄子、 唐島栄子、酒井康恵、正林真由美、杉村百合子
整理調査員	田中克子
整理作業	安部国惠、有島美紅、丹澤早苗、大神真理子、太田富美子、富田輝子、西村晴香、宮坂環

なお、調査中、文化庁調査官、増渕調査官、福岡県文化課の皆様をはじめ、多数の方々に観察して頂き、ご協力、ご助言を得た。感謝申し上げたい。

### 3. 調査の経過と保存処置

調査は、平成6年5月16日の周辺への挨拶回りから開始した。調査地はアスファルト塗りの駐車場であったため、21日にカッターをいたれた。また、周辺への騒音を考慮し、26日より防音壁で調査地を囲んだ。28、29日にかけ、重機にて表土剥ぎを行い、石垣をほぼ露呈させる。6月1日に機材を搬入して石垣の清掃を開始し、16日に全景及び個別の遺構写真を撮影した。22日、福岡県文化課を交え、九州電力と石垣の保存について協議をおこなうが、変電所予定地の変更や建物の設計変更は不可能であるとの回答を受ける。再度、28日に文化庁柳調査官を交え、同協議を行う。7月12日、機材の撤収。27日、文化庁増瀬調査官視察。8月1日、石垣を保存する方針で九州電力と合意に至ったため、6日にマサ土を搬入し、埋め戻しを行った。8日、防音壁を撤去し、全ての作業を終える。

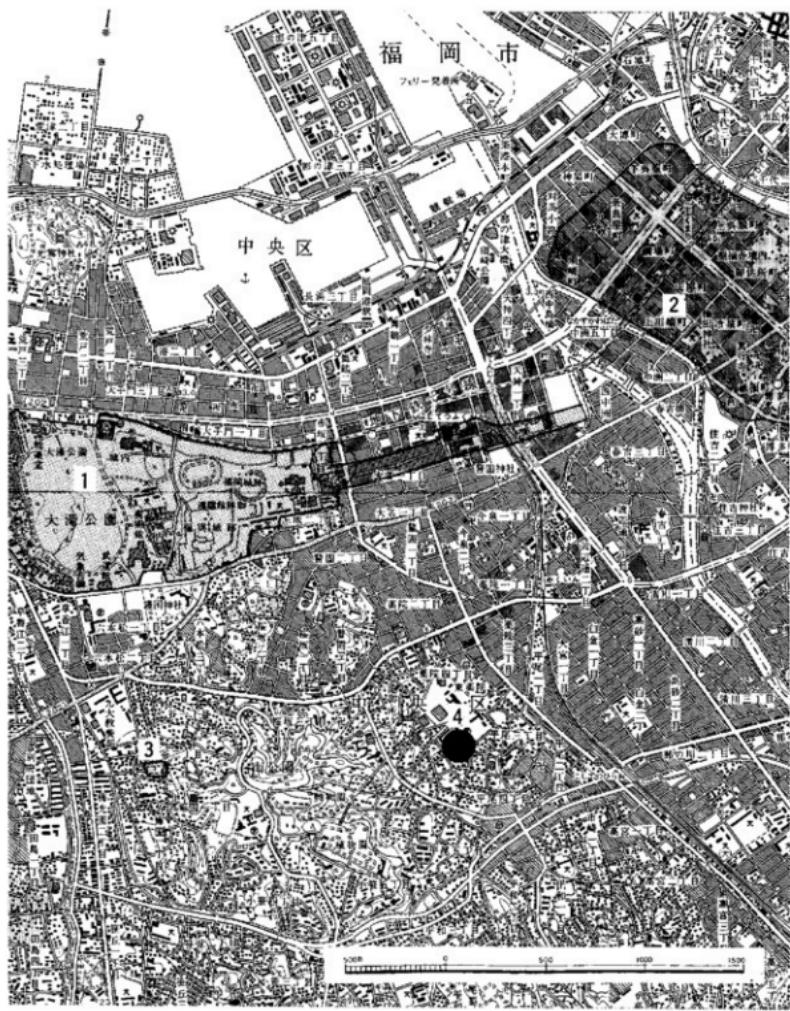
当初の設計では、石垣は直上に建物壁体が建つため約8mの掘削を受ける予定であった。調査中の協議においては、変電所から出力する電気配管との兼ね合い等から設計変更は不可能であるとの回答であったが、協議を重ねた結果、九州電力福岡支店の甚大なるご協力により、建物を西に移動させ、石垣を地下に保存することとなった。

## II. 遺跡の位置と環境

福岡城は博多湾を巡る海岸線のほぼ中央部に向かって北に伸びる独立丘陵の先端部に位置する。築城前の福岡城並びに周辺の自然地形については、貝原益軒の「筑前国続風上記」の記載や近年のボーリング調査、あるいは昭和63年より継続中の鴻臚館跡の発掘調査や福岡城壁前堀の調査などによって、ある程度の旧状復元がなされている。これによれば、福岡城は南側の赤坂山から伸びる福崎丘陵を堀切りにより切断し、丘陵頂部に天守台を据え、周囲の斜面を段状に造成して各曲輪を造り出していることが分かる。一方、福岡城の周辺は、西側は天然の入り江を取り込んで大堀（現在の大濠公園）とし、北側は遠浅の海岸を埋め立てて屋敷地とする。調査地点のある城の東側は、那珂川の沖積作用によって砂洲が形成され、中世までには部分的に陸地となっていたが、ここに東西に長い堀切りを造り、内堀と東方の那珂川を結んでいる。この堀切りは、東半部分が肥前堀（佐賀堀）、西半部分が中堀（紺屋町堀）と呼ばれる。調査地点は福岡城の内堀と中堀が合わさる北側のコーナー部分に位置している。

福岡城は関が原役の恩賞として筑前国を押領した田代長政が、7年の歳月を費やして造営した平山城である。総曲輪には天然の地形を利用し、防御施設として内堀を掘り、城内には47の櫓を持ったと言われる。肥前堀と中堀は、北側に広がる福岡城下町の主要部を防衛する意図を持って造られており、古絵図によれば3カ所に南へ渡る橋梁があり、それぞれの北岸には門が設置され、東から「数馬門」「薬院門」「赤坂門」と呼ばれていた。門および堀の北側は、南からの攻撃に備えて、石垣や土居で固められており、本格的な防衛線を形成していた。福岡市南区向野の地蔵神社に伝わる明治25年の絵馬を見ると、赤坂門に相当する位置に高い石垣が積まれているのが分かる。石垣は橋梁の両脇を固めるように築かれ、石垣の上には矢狭間を持つ白壁が巡っている（PL.19、20）。

明治以後の赤坂門周辺は、1891年（明治24年）の地図によると石垣（？）で護岸した道路が見える。1913年（大正2年）の地図ではここに市内電車の軌道が走っており、かなり道路が拡幅された状況が伺える。中堀の埋め立て時期は明確ではないが、大正10年代のことと考えられており、1930年（昭和5年）の地図では完全に市街化している。



1 福岡城跡 2 博多遺跡群 3 六本松遺跡 4 平尾古墳(消滅)

○ 調査地点

Fig. 1 福岡城跡位置図 (1/25,000)



Fig. 2 調査地点位置図 (1/2,000)



Fig. 3 調査区位置図 (1/500)

### III. 調査の記録

#### 1. 調査の概要

調査地点は、福岡城を取り巻く内堀が東へ折れて、中堀・肥前堀へと続く、その入口部分に相当する位置にある。福岡城古絵図には、このあたりに赤坂門と、門から南へ堀を渡る橋が描かれてあり、江戸時代には福岡城へ南から入る場合の玄関口に相当する重要な場所であったものと見られる。明治時代以降は市街化し、大正10年代に埋め立てられたものと考えられる。

これまで赤坂門は調査地点の北東側にその位置が想定されており、当地点は堀の中に含まれるのではないかと見られていた。しかし、試掘調査によって石垣が発見され、赤坂門の位置が予想よりも南西へずれることが判明した。

本調査は、試掘により石垣が発見された変電所用地の北東隅 $15\times17\text{m}$ の範囲を掘削して行った。この結果、大正末に埋め立てられた福岡城の石垣が江戸時代のままの姿で現れた。石垣は地表下約0.6mに現れ、発掘調査区内で南北長12m、東西長5mが確認され、北および東はそのまま調査区の外へと続いている。石垣の高さは3m強あるが、石垣上部は明治・大正時代に破壊されており、本来はもっと高い石垣であったものと考えられる。石垣が造られたのは江戸時代初期と考えられるが、江戸時代末までに石垣の崩壊修復や堀の浚渫などの工事が行なわれていたことが調査の結果明らかとなった。堀の埋土からは、江戸時代の瓦や陶磁器、明治時代の生活雑貨のほか、古代～中世の輸入陶磁器等が出土した。このうち、軒瓦には黒田家の家紋である三つ藤紋や黒餅紋などをあしらったものがある。また、明治・大正時代に石垣上部を破壊して整地した後に、建物が造られており、これに備えつけられた便所（便壜5つ）を検出した。



PL. 1 調査区全景（南西から）

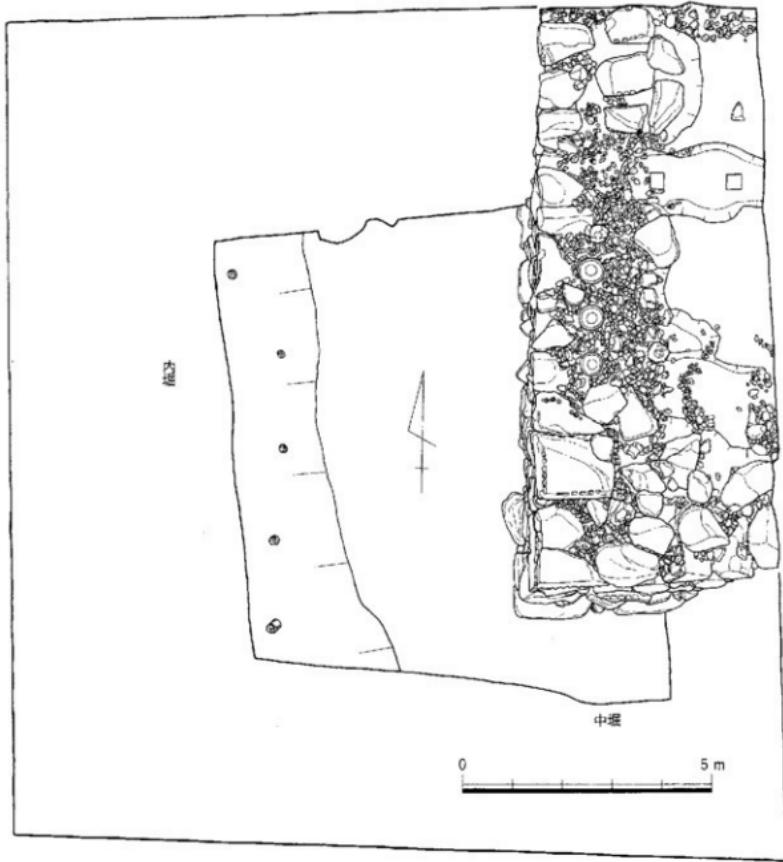


Fig. 4 平面実測図 (1/100)

## 2. 遺構

調査区は対象地北東隅の東西15m、南北17mの範囲に設定した。隣地との間に防音壁を置く必要があったため、北側に3m、東側に3.5mの引きを取っている。また、石垣という遺構の性格上、山留め工事を行うことができず、調査区の下のりは、東西8m、南北9mと狭い面積になった。

検出した遺構は、福岡城の堀（内堀と中堀）の一部と、この堀の岸壁面を覆る石垣である。この他に、明治・大正期に埋め立てた痕跡（杭列）や、石垣上部を破壊して造られた建物に伴う便所などが見られた。

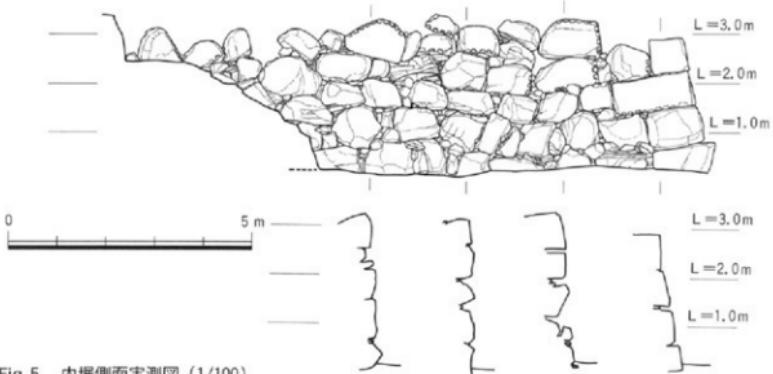


Fig. 5 内堀側面実測図 (1/100)



PL. 2 内堀石垣側面（西から）

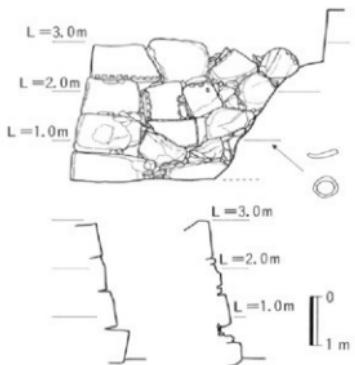


Fig. 6 中堀側面実測図 (1/100)



PL. 3 中堀石垣側面（南から）

### (1) 石垣と堀 Fig. 4～6 PL. 1～11

調査区内で、南北方向に伸びる石垣と東西方向に伸びる石垣とが隅角を造る部分を検出した。この石垣は、それぞれ内堀の外壁と、中堀の北壁を護るもので、便宜上、前者の石垣を内堀石垣、後者を中堀石垣と呼ぶことにする。

まず石垣の上面を見てみたい (Fig. 4)。石垣は地表下約0.6mに検出した。調査区内で確認した長さは、内堀石垣が天端で南北長11.5m、中堀石垣が天端で東西長5.0mである。石垣の隅角は、北側の道路南端から南へ14.5m、東側の民家西端から西へ8.5mの位置に組まれており、86°とやや鋭角をなす。石垣の上面は後世に著しく擾乱を受け、近代の建物に伴う便所の壺やコンクリート柱などが埋め込まれていた。また、裏込めの北端部と南西部には穴が掘られ、ここに取り壠した石垣の石を埋め込んでいた (PL. 6、7)。

次に裏込めであるが、石垣の裏込めは、石垣外縁に沿った幅約2.5mの範囲にのみ跡が見られ、それより内側は福崎丘陵の基盤土である風化頁岩を盛り上げている。石垣が保存されることになったため、石垣裏込めの断ち割り調査を行っていないので明確ではないが、繩張りに従って土盛りであらかたの形を造り、その後石垣を積み上げながら裏込め石を充填していくのではないかと見られる。であるとすれば、調査区の北端部に見られる幅約0.6mの帯状の疊群は裏込め石と見られ、調査区北端から約2m北側の区外で石垣が東へ折れていることが予想される。なお、裏込め石には拳大～人頭大の自然礫を用いている。

今度は石垣の側面を見てみたい。石垣の天端から堀底面までの深さは3.05mを測るが、石垣上部は明治・大正時代に破壊されており、破壊される前の石垣はこれ以上の高さを持っていたものと考えら



PL. 4 内堀基底の杭列（南から）



PL. 5 石垣上面の状況（南東から）



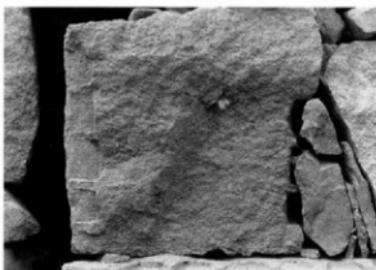
PL. 6 石垣上面北端の石棄て穴（東から）



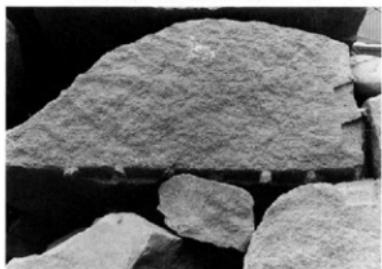
PL. 7 石垣上面南西隅の石棄て穴（東から）



PL. 8 中堀石垣の刻印（南から）



PL. 9 中堀石垣のクサビ痕（南から）



PL. 10 内堀石垣のクサビ痕（西から）



PL. 11 内堀石垣のクサビ痕（西から）

れる。隅角は目地が通り、石垣は最大で5段に積まれているが、5段目は虫食い的に破壊されている。石垣の傾斜角度は78~79°で、垂直ではなく若干の傾斜を持つ。石積みの方法を見ると、南に聞く赤坂門の正面にあたる中堀側の面は比較的大きめの割り石をきちんと積んでいるに対し、内堀の面は自然礫を野面積みしており乱雑な印象を受ける。これは、来訪者が城下に入る際の印象を考えてのことと見られる。

石垣の基盤土は砂で、石垣の基底には偏平な大型石を捨て石として敷いており、15~20cmほど砂に食い込んでいる。2mおきに石の下を掘削してみたが、胴木は敷かれていなかった。

石材は下部に安山岩系が多く、基底の9個の大型石の内7個を占める。逆に上部には花崗岩が多く、特に5段目は全て花崗岩であるが、この石材の違いは石垣の崩壊と修復工事によって起こったと考えられる。また、石質にもよるが、花崗岩のほとんどは割って用いており、安山岩系の石は自然石のままである。花崗岩の割れ口にはクサビの痕が明瞭に残っており(PL. 9~11)、中堀石垣のひとつには「一〇」と刻まれていた(PL. 8)。

堀内の堆積土は、内堀と中堀で大きく異なっていた。内堀は、砂、汚泥、砂、埋め土、表土の順に堆積しており、堀がある程度自然に埋没した後に、土砂を搬入して埋め立てた状況である。これに対し、南側では薄い汚泥の上に直接埋め土が乗っており、堀の浚渫が行われていたことを示している。また、重機で掘削中に、東西列の杭列を検出したが、これは埋め立てる際の土留めの痕と見られる。

堀の底面では、内堀側で石垣沿いに犬走り状の平坦面を検出した。この平坦面は4mほどの幅に造られており、石垣の安定を考えてのことか。また、この犬走りの落ち際に南北方向の杭列が見られたが(PL. 4)、これは近代以降に打たれたものと思われる。

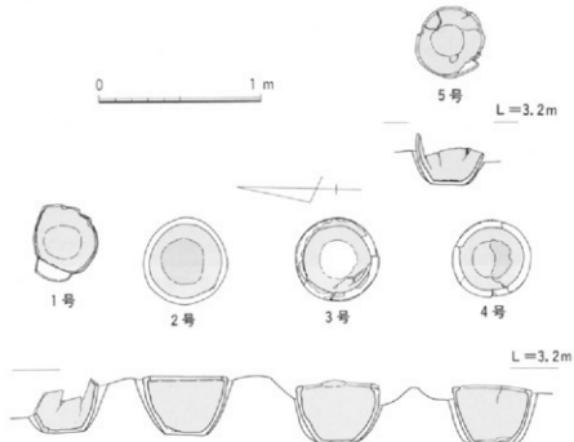


Fig. 7 便壟実測図 (1/30)



PL.12 石垣上面の状況（南から）



PL.13 石垣上面の便壟（北から）



PL.14 石垣上面の便壟（東から）

## (2) その他の遺構 Fig.7 PL.12~14

Fig.7に図示したものは、石垣上面で検出した埋め甕である。裏込め石を取り除いて穴を掘り、陶器の甕を据えている。便所の便器で、大正10年代に石垣が破壊され、中塙が埋め立てられた後にこの場所に建てられた建物に伴うものと考えられる。甕は南北に4個が並び、これと列を異にして東側に離れて1個が配置されている。南北の列の甕を北から1~4号とし、東に位置するものを5号とする。それぞれの甕の間隔は、心々距離で1~4号が0.75m、0.95m、0.95mの距離を置き、5号は4号との間に1.3mのやや広めの距離を置いている。

甕は外面に釉薬をかけた陶器で、口縁が内側に直角に折れる器形で、平底である。1、5号は上部が削半されて失われている。口径が48~52cm、器高が36cmを測る。

甕の内面には、し尿の痕跡である白色の凹形物が厚く貼り付いており、凹形物の残存は、1号が側面から底に徐々に厚く、2号は側面が薄く底が厚い、3号は側面が厚く（特に口縁が分厚く）底部ではない。4号は全体に薄く、底部の一部に固まりがある。5号は側面に厚く、底に薄い。

これらの甕は、現場で1/10の実測図を作製しそのまま廃棄したが、3号のみは福岡市博物館の収蔵品となった。

## 3. 遺 物 Fig.8 ~13 PL.15~18

出土遺物は江戸時代の瓦、陶磁器、近世の生活雑貨などである。基盤層である砂層の直上で江戸期の瓦が多く出土し、他の遺物は堀底に近い汚泥層の中から出土した。

1~34は軒丸瓦である。瓦当の文様から3種類に大別しうる。1~4は三つ巴文、5~8は黒餅文、9~34は三つ藤文である。さらに9~34は枝葉の数などにより9種類に細分できる。

1~4は三つ巴文で、巴は逆時計回りに尾を引き、3、4は何番の可能性がある。1は完存し、背面に上方からクギ穴2孔をあけている。内面には横骨の痕が残る。内区の文様は、他の3点に比べ肉厚で立体的な印象を与える。内区の珠文数は14である。焼成により黒色を呈する。全長は27.6cm、瓦当径14.5cm。2は瓦当の小片で、珠文数は9か。焼成して黒色。瓦当径は13.8cmに復元される。3は瓦当のみ完存しており、珠文数は14である。焼成して黒色とする。瓦当径は14.7cm。4は瓦当下半の残欠で、珠文数は14。焼成して黒色を呈し、瓦当径は15.7cmに復元される。

5~8は黒田家家紋の黒餅文を瓦当文様とする。5は玉縁を欠く。背面に上から2ヶ所に穿孔しており、内面には横骨痕と布目が残る。内区の珠文数は8である。淡灰青色を呈し、須恵質である。瓦当径は13.2~13.6cm。6は丸瓦部が剥がれている。珠文数は12。灰~黒色を呈し、焼成が不良。瓦当径13.6cm。7は瓦当は完存しており、他に比べると瓦当が肉厚である。珠文数は11で疎らな印象を受け、外区の幅が狭い。灰~黒色を呈し、焼成が不良である。瓦当径は14.0cm。8は瓦当の一部である。珠文数は9に復元される。黒褐色を呈し、焼成が不良である。瓦当の復元径は14.4cm。

9~34は黒田家家紋の三つ藤文を内区に配する一群で、3方に伸びる藤蔓に付く枝葉の数などから9種類に細別できる。枝葉数が最も多く32~32~30と不揃いなもの（9~11）、枝葉数が30を数えるもの（12）、27程度のもの（13）、同じく23のもの（14）、21のもの（15~23）、18のもの（24~30）、16で蔓の方向が逆を向くもの（31）、13のもの（32、33）、枝葉数は不明だが瓦当径が大きいもの（34）である。

9~11は器面の残りが悪いが、同范であろう。いずれも枝葉は32~32~30で、瓦当径が14.9~15.3cm、内区の径が10.7~11.0cmに収まる。瓦当の裏面に丸瓦を貼り付けており、接合部には刻み目

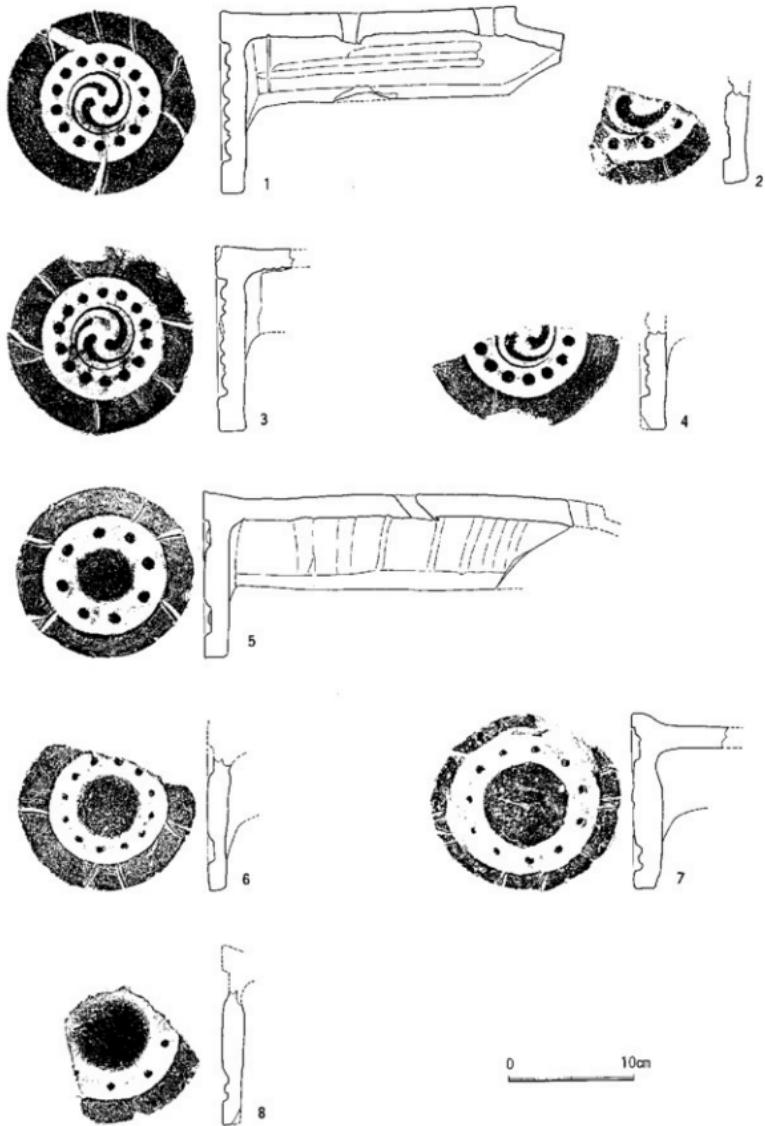


Fig. 8 出土遺物実測図・I (1/4)

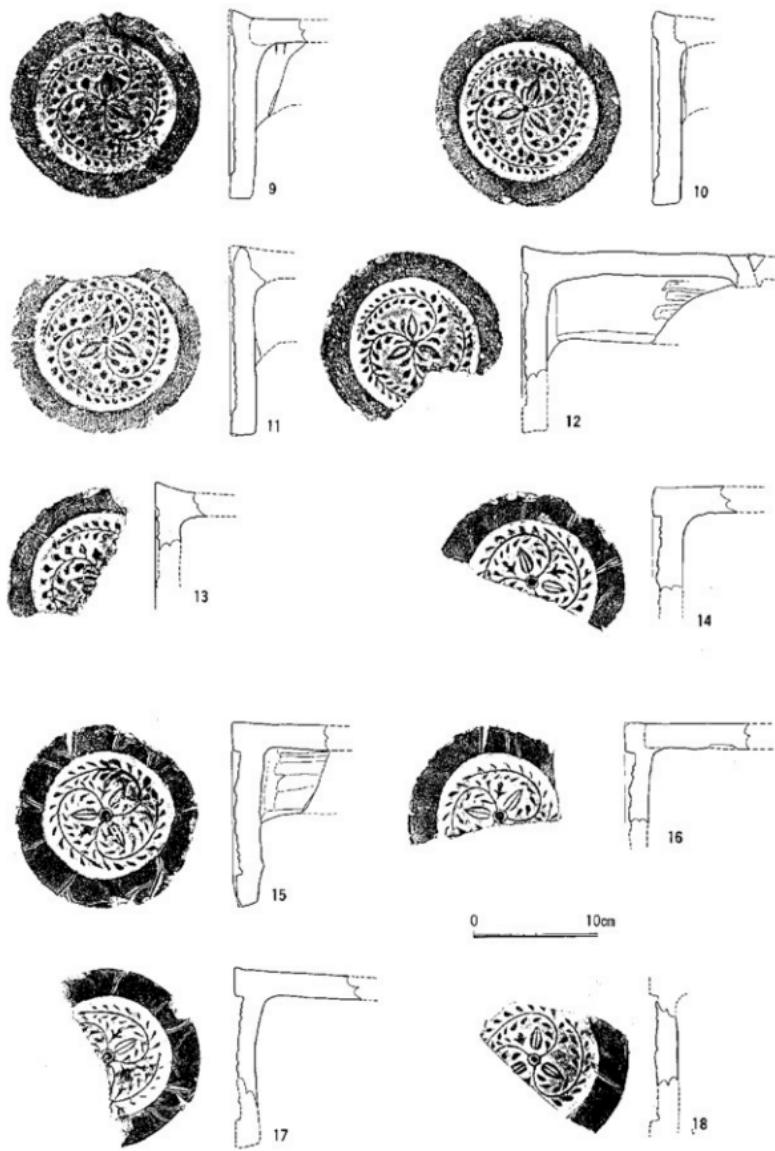


Fig. 9 出土遺物実測図・II (1/4)

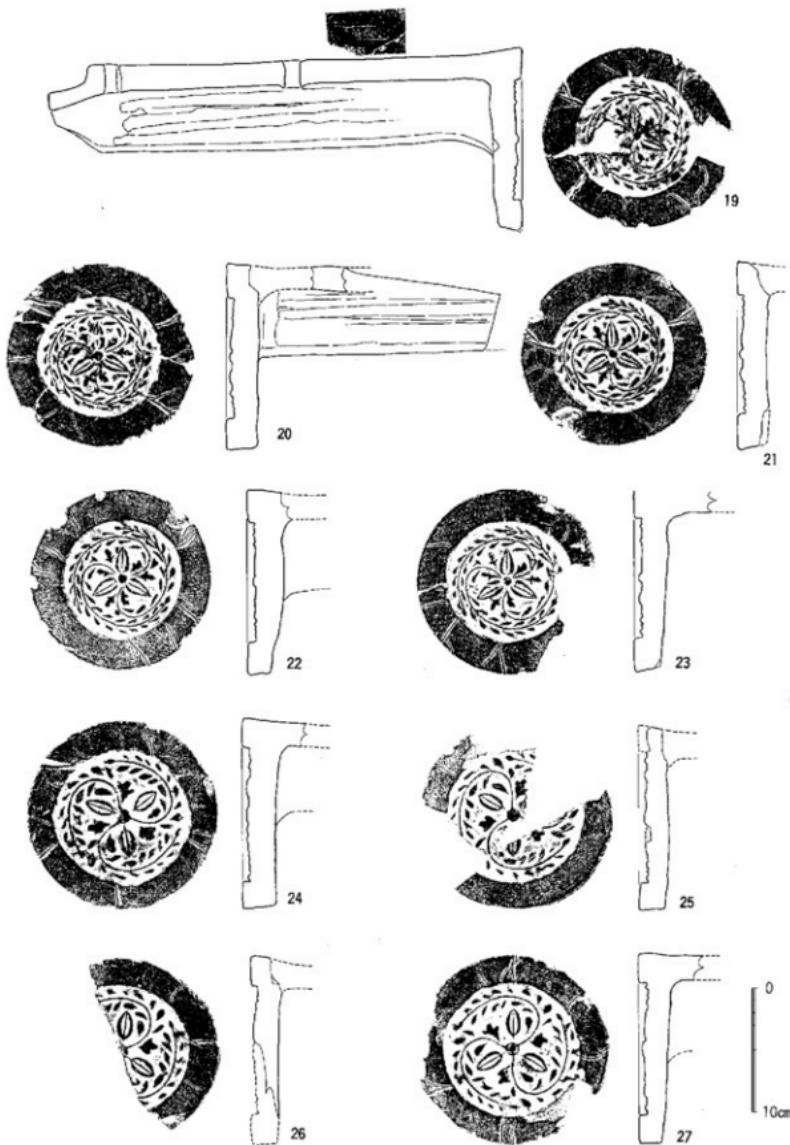


Fig.10 出土遺物実測図・III (1/4)

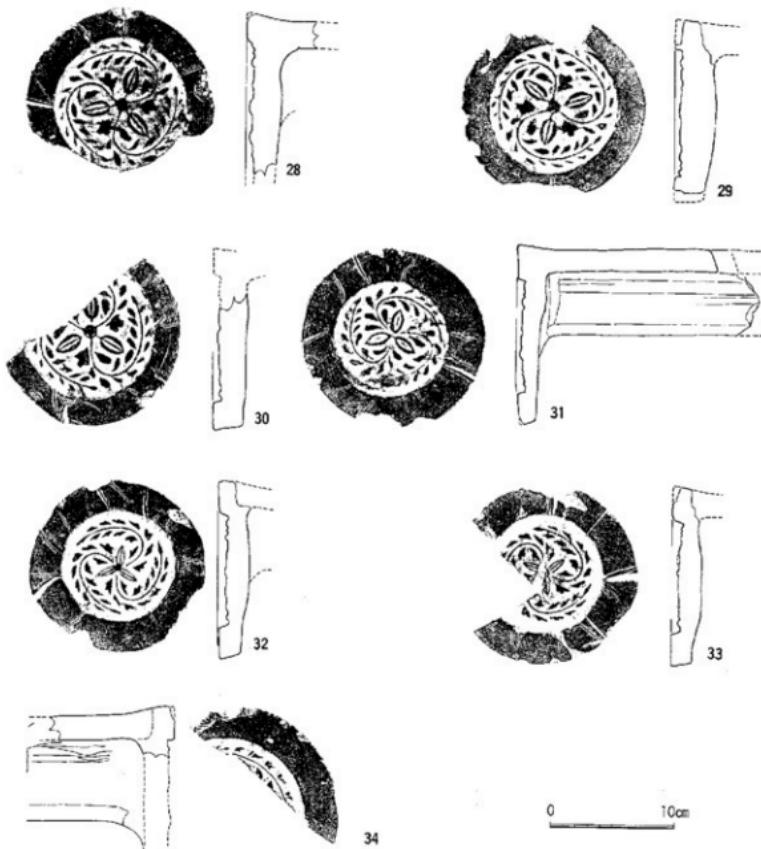


Fig.11 出土遺物実測図・IV (1/4)

を入れている。器面の風化具合から見て、長期の使用が考えられる。淡灰～黒色を呈する。

12は瓦当の一部が欠けているが、枝葉が30を数えるものである。9～11に比べて径が一回り小さく、内区外縁の段が鋭角的である。灰～黒褐色を呈し、焼成が不良。瓦当径14.7cm、内区径10.3cm。

13は小片のため枝葉数が明確でないが、内区外縁の段や枝葉の形から見て、9～11に近いタイプの瓦当と考えられる。ただし、枝葉数は27前後である。淡灰～黒色に焼し、瓦当の復元径は16.0cm。

14は下半を欠くが枝葉数は23であろう。黒色に焼され全体に薄く銀色がかる。瓦当径15.0cm。

15～23は枝葉数が21の三つ藤文である。15～17は同范である。枝葉は21～21～20と不揃いで、内区はやや凸面をなす。范型の木目が残り、木目の特徴から同范と知れる。木目の方向は全て異なっており、范型に天地はなかったのである。15は文様の一部が潰れている。いずれも、焼して黒色とし、

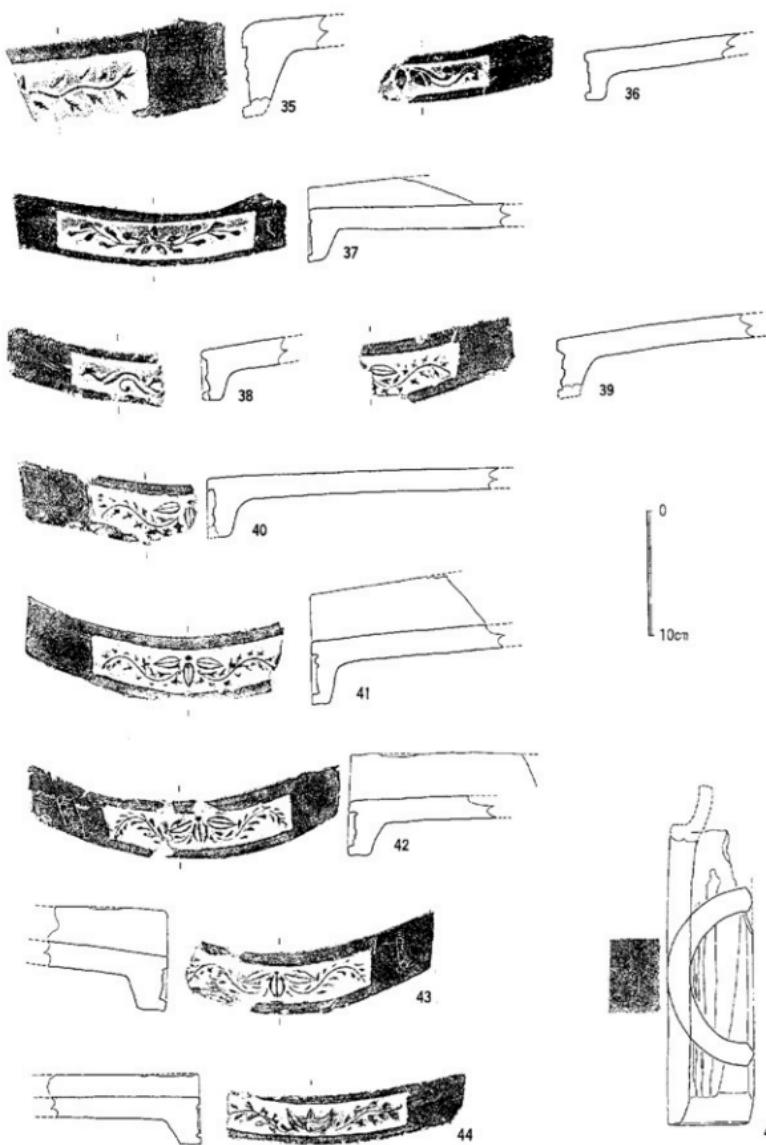


Fig.12 出土遺物実測図・V (1/4)

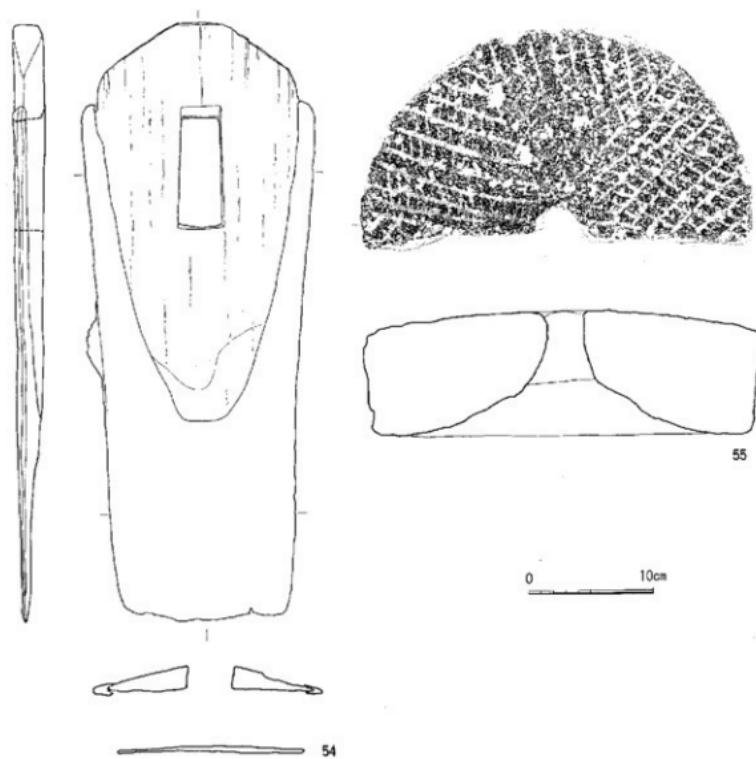
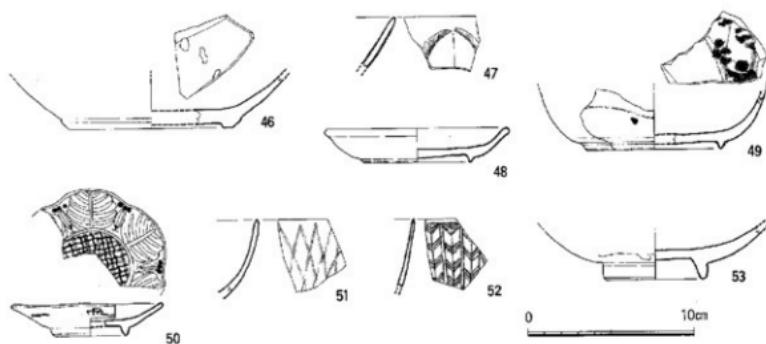


Fig.13 出土遺物実測図・VI (1/3, 1/4)

薄く銀色に発色する部分もある。瓦当径は14.3cm～14.6cmに収まる。18、19は同范である。枝葉は全て23で、焼して黒色とし、一部が銀化する。瓦当径は14.6～14.8cmである。20は小片のため明確ではないが、枝葉数が21もしくは22になるものと思われる。焼して黒色とし、瓦当の復元径は15.0cm。21～23は同范である。枝葉は全て21で、焼して黒色とし、一部が銀化する。瓦当径は14.5～14.8cm、内区径は9.3～9.5cmに収まる。

24～30は枝葉が18を数えるものである。24～27は范型についたキズにより同范であることが分かる。27のみは2度押しつけており、范型がずれた痕跡がある。焼して黒色とし、一部が僅かに銀色を呈するものもある。瓦当径は14.8～15.3cm、内区径は10.4～10.5cm。28～30は24等と同じ范であるが、文様の影りが全体に甘くなっている、范を踏み返したものと考えられる。焼して黒色とし、一部が銀化する。瓦当径は14.3～15.0cm、内区径は10.0～10.3cm。

31は唯一、藤の葛が他と対反時に時計回りに伸びていくものである。枝葉数は16～16～17である。焼して黒色とし、一部は銀化。瓦当径は14.5cmで、外区は幅広い。

32、33は范型の木目とキズにより、同范と知れるが、互いに大地逆に文様を打っている。枝葉は全て13を数える。瓦当の裏面に丸瓦を貼付しており、接合面に刻みを入れる。焼して黒色とし、一部銀色を呈する。瓦当径は14.0cm、内区径は8.9～9.0cmに収まる。

34は他と比べて瓦当の径が大きい。小片だが、瓦当の復元径は18.0cmである。

35～44は軒平瓦である。35～38は均整唐草文、39～44は唐草を藤に替えた瓦当文様を持つ。

35は大型品である。焼して黒色にする。瓦当の高さは7.3cm、外区幅は6.2cm。36は中心飾りが下向きの花弁である。焼して黒色とする。瓦当高3.7cm、外区幅5.0cm。37は中心飾りに三弁の花文を配す。焼して黒色。瓦当高4.1cm、幅21.8cm。38は黒～灰色で、瓦当高3.9cm、外区幅4.9cm。

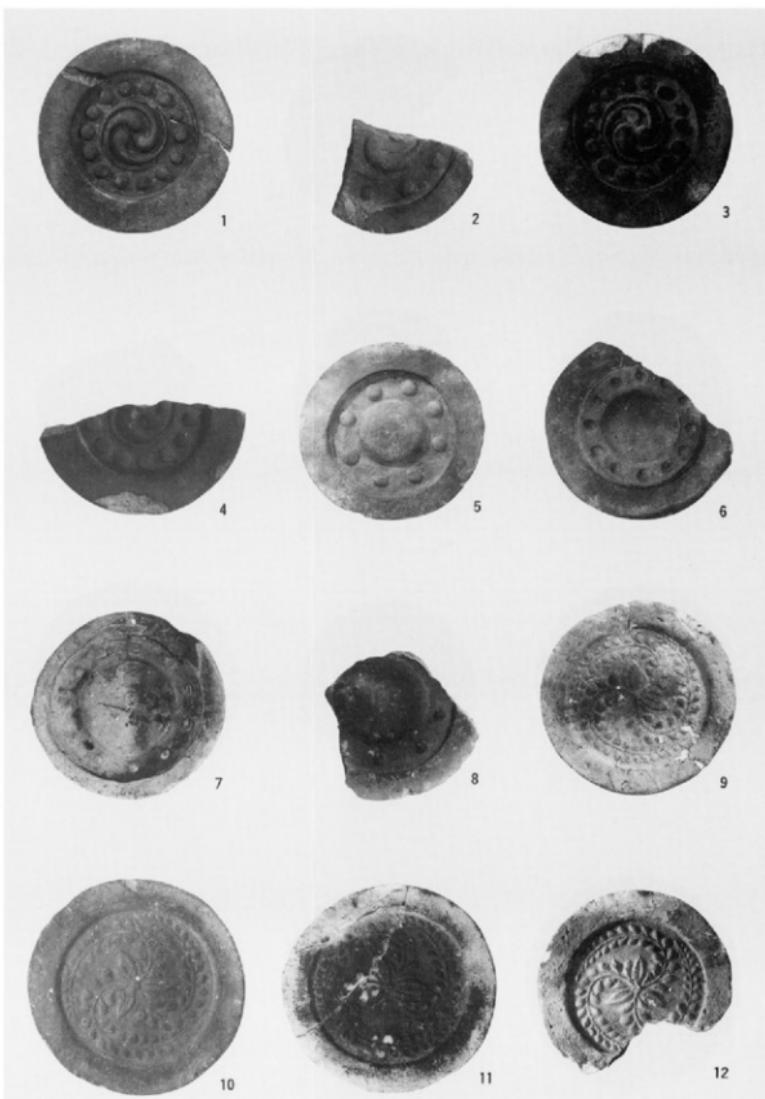
39～41は同范と見られ、中心飾りに下向する三弁の花文を配し、藤の枝葉は菱形を呈し稜を持っていて。焼して黒色とし、41は大部分が銀色に発色している。瓦当高と外区幅はそれぞれ、39が4.6cm、4.5cm、40が4.5cm、5.3cm、41が4.4～4.5cm、5.1cmを測る。42、43も同范である。中心飾りは同じく下向の三弁花文だが、枝葉は丸みを持ち稜がない。また、内区が一方に偏り、広い方の外区に「今宿又市」の刻印を打つ。焼して黒色にし、一部が薄く銀色をなす。42は瓦当高3.9～4.3cm、瓦当幅24.8cm、外区幅は5.9cmと3.8cm。42は瓦当高4.3cm、外区幅4.9cm。44は中心飾りが上向きの三弁花文である。焼しにより黒色を呈する。瓦当高3.7cm、外区幅4.5cm。

45は丸瓦である。玉縁を欠くが、全長は27cm程度。内面に模骨痕がある。焼して黒色とし、凸面に「今宿又市」と刻印する。

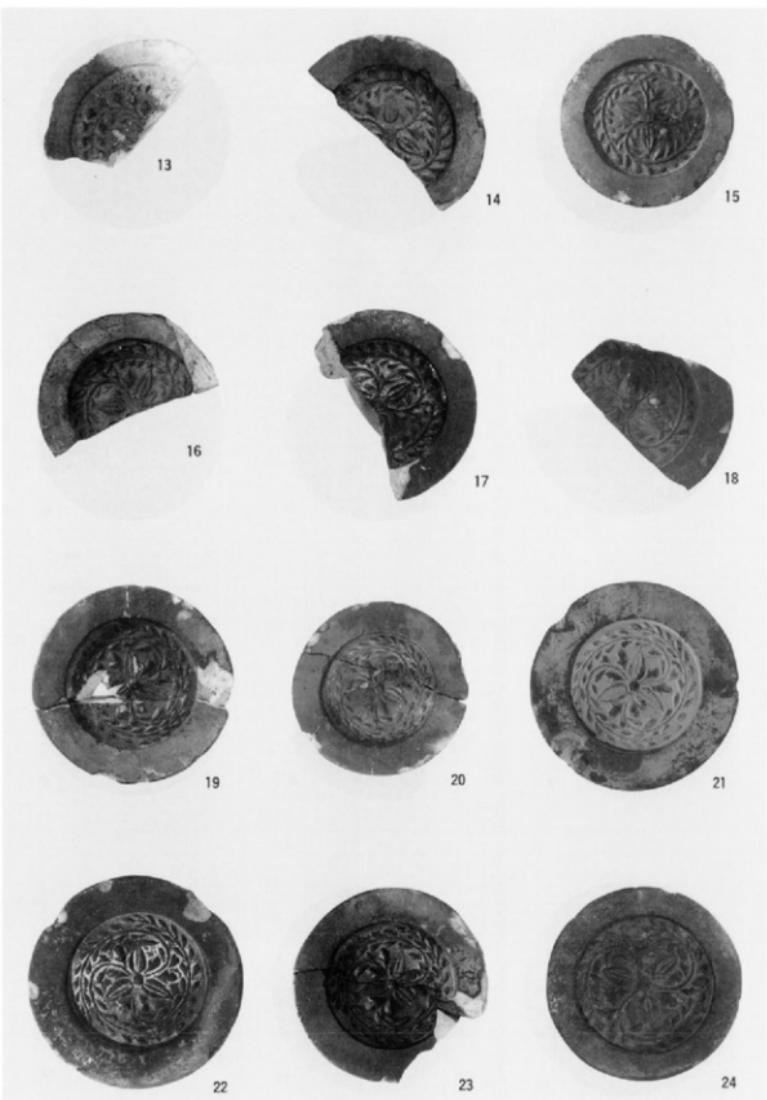
46～48は青磁器である。46は越州窯系青磁碗の小片である。胎土は淡灰色を呈し、オリーブ色の釉を全体にかける。豊付のみ露胎。見込みに目土が残る。47は龍泉窯系青磁碗の口縁部小片である。外面に片切彫りで花弁文を入れる。灰白色の胎土に淡緑色の釉をかける。48は青磁の皿である。胎土は白色を呈し密。釉は緑味のある半透明釉で、全体に施釉し、内面には特に分厚く施釉する。豊付は露胎である。近代の製品か。

49～52は染付けである。49は皿か。吳須は花弁が濃く他は薄いコバルト色を呈する。50は輪花皿である。見込みには二重圈線の内に格子文を入れ、体部には杉状の文様を入れる。51は碗の口縁部片で、吳須の発色は薄い。52は口縁部片で、吳須は薄い緑色。49、51は18世紀代、他はそれ以降の製品かと思われる。

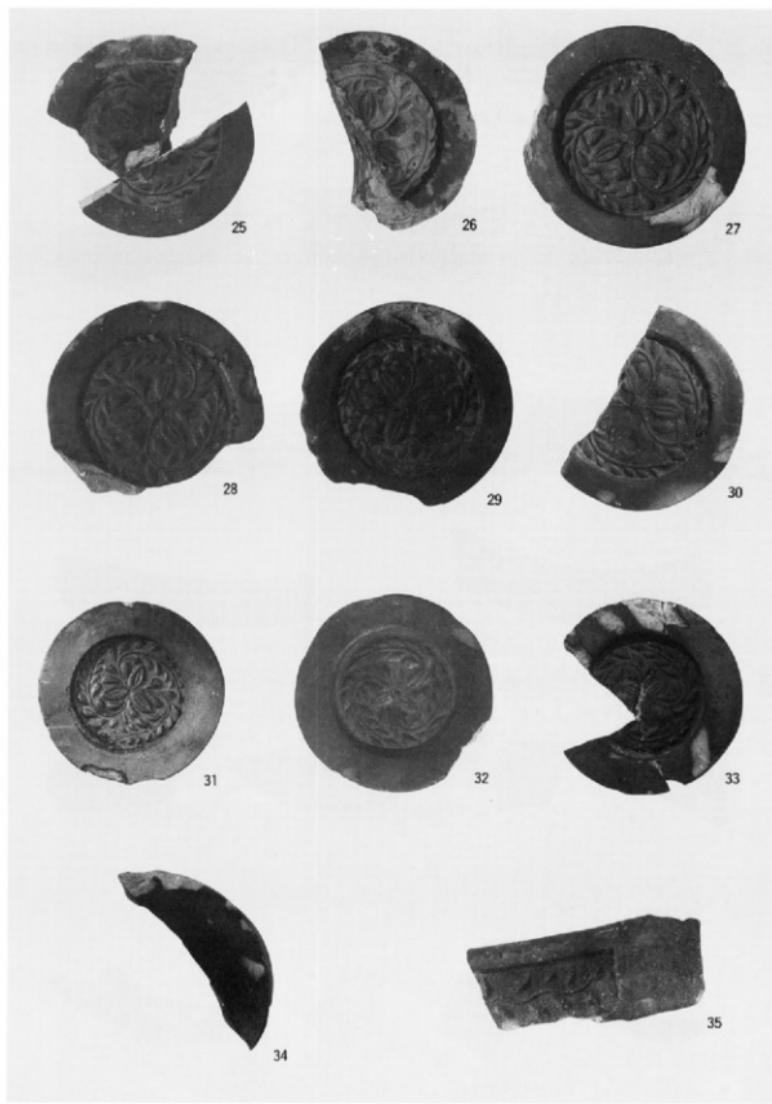
53は唐津焼きである。内面には渦状にハケを施す。



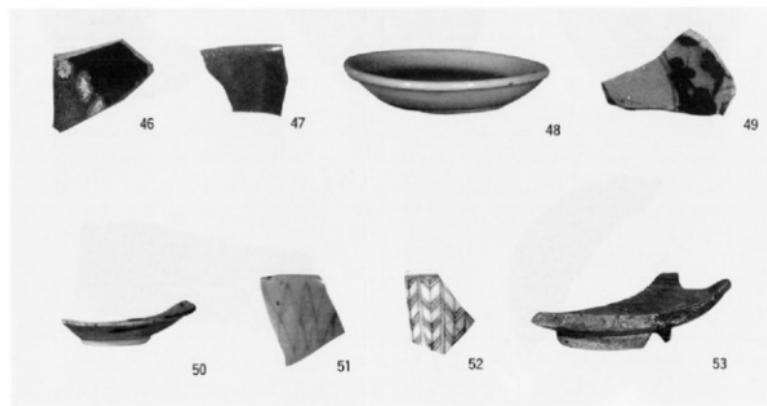
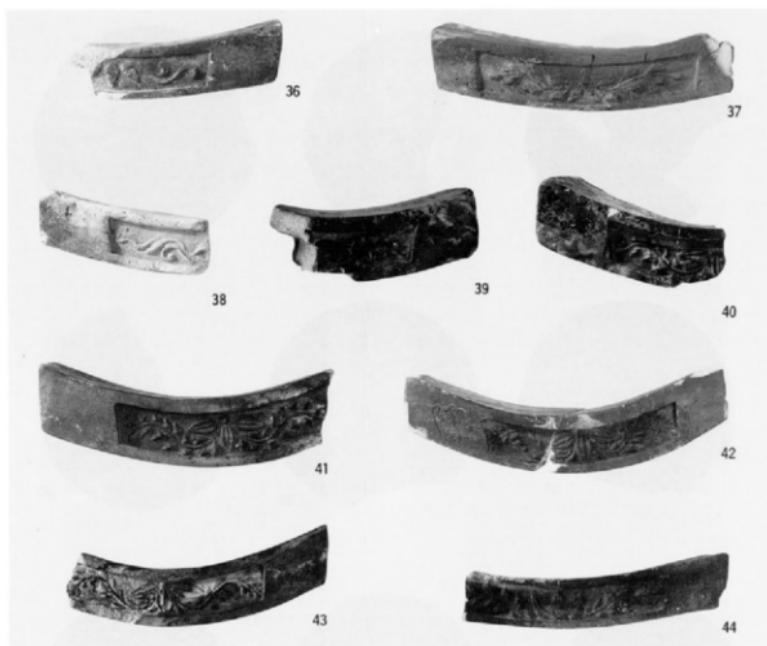
PL.15 出土遺物・I



PL.16 出土遺物・II



PL.17 出土遺物・III



PL.18 出土遗物·IV

54は鎌である。木製板に鉄刀を付けたものである。柄は直角に取り付く。鉄刀は取り付け部を袋状にしている。

55は挽臼の下臼である。格子目の擦り目を入れる。凝灰岩製か。

## IV. おわりに

今回の調査で検出された遺構は、福岡城赤坂門の基礎と見られる石垣とそれを取り巻く堀の一部である。以下、本文と重複するが、調査によって得られた成果を箇条書きにまとめる。

1. 調査地点は、福岡城東側の内堀が東へ折れて、中堀・肥前堀へと続くコーナー部分に位置する。福岡城古絵図には、このあたりに赤坂門と赤坂門から南へ堀をわたる橋梁が描かれており、江戸時代には、中堀の北側に広がる城下町を護る重要な防衛施設としての役割を担っていたものと見られる。
2. 試掘調査以前には、赤坂門は調査地点の北東側にその位置が想定されており、当地点は堀の中に含まれるものと見られていた。調査により、赤坂門が想定よりも南西へずれることが判明した。
3. 発掘調査は、申請地の北東隅 $15 \times 17$ mの範囲を掘削して実施した。検出した石垣は、調査区内で南北長12m、東西長5mを測り、北及び東側はそのまま調査区外へと伸びている。石垣の高さは3m強であるが、石垣上部は明治～大正時代に破壊されており、本来もっと高い石垣であったものと考えられる。
4. 石垣の側面は、中堀側の石積みが丁寧に行われているのに対し、内堀はやや雑であった。これは、中堀側が赤坂門の正面に当たるという意識が働いていた結果と思われる。
5. 石垣が造られたのは江戸時代初期と考えられるが、石垣の上部と下部で石材が異なっており、石垣の崩壊を修復する工事を行った結果と見られる。また、中堀と内堀では堀底に堆積した汚泥層の厚さに差があり、堀の浚渫が行われていたものと見られる。
6. 堀の中からは、江戸時代の瓦や陶磁器、明治～大正時代の生活雑貨等が出土した。また、近代に、石垣上部を破壊し整地した後に造られた建物に伴う便所跡があった。

PL.19、20は福岡市南区向野に所在する地録神社に奉納された絵馬で、福岡市教育委員会文化財整備課の三木隆行氏が収集された福岡城関連史料のひとつである。福岡城の全体を大堀から博多までにわたって描いた絵馬で、額には明治25年8月1日奉納と書かれてある。掲載した写真はその内の一部で、福岡城の南西方向から中堀、肥前堀を俯瞰したものである。明治25年は中堀・肥前堀が埋め立てられる以前の時期にあたるが、これには赤坂門の石垣がくっきりと描写されている。赤坂門へ南から渡る橋の両側に、周囲よりも一段高い石垣が方形に組まれており、石垣上には矢狭間を持つ白壁と松の木数本が見られる。調査地点は、向かって左側（西側）の石垣の左手前の部分に相当するが、ここで注目されるのは、この石垣の北端が東側に折れて隅角を造っていることである。本文中にも述べたように、調査区の北端部に東へ伸びる裏込石が見られ、調査区の北外で石垣が東へ折れることが予想されたが、この絵馬に描かれた状況にそれが符号している。また、本調査地点の北側約30mに位置する福岡城第5次調査で検出した石垣の天端は標高2m弱で、今回検出した石垣のそれより1m強低い。ただし、石垣上部は両地点ともに破壊を受けており本来の比高差を示すものではないと考えられるが、これも絵馬に書かれた状況に符号するものと考えられる。



PL.19 福岡市南区向野地録神社絵馬



PL.20 同上拡大

福岡城  
赤坂門跡

—福岡城跡第26次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第463集

1996年3月31日

発行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区天神一丁目8-1

印刷 株式会社ドミックスコーポレーション  
福岡市博多区博多駅南六丁目6-1

赤

坂

門

跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書  
第43集

1  
9  
9  
6

福岡市教育委員会